

令和 7 年 6 月 19 日現在

機関番号：33921

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2020～2024

課題番号：20H01662・23K20180

研究課題名（和文）子どもの声を聴く保育実践の探求：ドキュメンテーションによる子どもの権利の保障

研究課題名（英文）A study on the practice of child education and care to listen to children's voices.; Ensure children's rights through the pedagogical documentation.

研究代表者

白石 淑江 (Shiraishi, Yoshie)

愛知淑徳大学・愛知淑徳大学・客員研究員

研究者番号：10154361

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 14,130,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、イタリアのレッジョ・エミリアの「傾聴の教育学」における「ドキュメンテーション」に着目し、「子どもの意見表明権（聴かれる権利）」を保障する保育実践理論の探究を目的とした。方法は、海外調査でその思想や実践例を把握し、それを踏まえて日本の協力園で試行的実践を行い、基本モデルを検討した。

その結果、子どもは有能な行為主体であり文化を創造する市民であるとの子ども観に立ち、多様な表現方法（100の言葉）を用いて「子どもの声を聴く」こと。ドキュメンテーションを媒介として、子どもたちと共に保育者や大人が対話し、子どもの声を生かした知識や価値の共同構築をめざすことを支柱とする基本モデルが考案された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、乳幼児は未熟な声なき存在ではなく、独自の興味や視点で周囲と関わり、その経験を通して意味を生成し、語る事ができる有能な存在であるとの子ども観に立つ。そして、保育者や大人が「ドキュメンテーション」や「100の言葉」を用いて、乳幼児の豊かな声に耳を傾け、対話を通して、共に知識や価値を創造する保育実践の基本モデル構築を目指した。

国連・子どもの権利委員会は「乳幼児期における教育の権利は出生時に始まる」としており、乳幼児の教育に対する権利をどのように保障していくかは、今後の重要課題である。本研究は「子どもの意見表明権（聴かれる権利）」や「学ぶ権利」を保障する保育実践に貢献するものである。

研究成果の概要（英文）： This study focused on "documentation" in the "pedagogy of active listening" practiced in Reggio Emilia, Italy. It explored a practical model for ECEC in Japan that ensures children's right to express their opinions and be genuinely listened. The research involved examining the theory and practice of documentation through international fieldwork, developing a practical model through pilot implementation at partner nursery schools in Japan. The resulting model is based on key concepts: nursery teachers and other adults view children as competent agents and citizens who actively create culture. They listen to children's voices through multiple forms of expression-the "hundred languages"-and engage in dialogue through documentation. This enables teachers to find out what and how children are exploring, and to co-construct knowledge and values from the children's perspectives. Such practices help ensure that children's right to express their opinions and be listened to is respected.

研究分野：子ども学および保育学関連

キーワード：子どもの声を聴く 子どもの権利 ドキュメンテーション 保育実践 レッジョ・エミリア スウェーデン

1. 研究開始当初の背景

わが国では、子どもの権利条約の批准以降、子どもの権利に関する様々な取り組みが行われているが、幼児教育・保育における子どもの意見表明権（聴かれる権利）の保障についてはこれからの課題である。子どもの声を聴くことを中核とするアプローチでは、イタリアのレッジョ・エミリア市の幼児教育が世界的に注目されている。その実践では、子どもたちはすでにそれぞれの世界観をもち、それを表現することができるという子ども像を示すとともに、多様な表現媒体を用いて子どもたちの声を聴き、他児との関わりや保育者との対話を通して、知識や価値を共同構築することを目指している。わが国では、2000年に開催された「子どもたちの100の言葉」展を契機として、レッジョ・エミリアの教育思想やそのツールであるドキュメンテーションが広く知られるようになった。しかし、ドキュメンテーションについて言えば、多くの場合、教師の省察や保護者との連絡のためのツールとして使用されており、「子どもの声を聴く」ためのツールとしては十分検討されていない。

2. 研究の目的

本研究では、「ドキュメンテーション」と呼ばれるレッジョ・エミリアの保育記録の営みに着目し、子どもの「意見表明権（聴かれる権利）」を保障する保育実践の理論を探究する。第1に、レッジョ・エミリア様式をとるイタリア、スウェーデンの教育実践理論やその実際を把握する。第2に、日本の保育施設の協力を得て、多様な視点からドキュメンテーションによる「子どもの声を聴く」実践を試み、海外調査の結果を踏まえて、基本モデルの構築を目指す。

3. 研究の方法

共同研究者5名が分担し、「海外調査」と「国内調査」を行った。COVID-19パンデミックにより、研究期間前半は調査の進行が遅れたが、後半には遅れを取り戻すことができた。

(1) 海外調査

[イタリア]

文献研究を行うとともに、2020年よりレッジョ・チルドレンが主催するウェビナーに参加し、レッジョ・エミリアの教育哲学や実践理論について理解を深めた。また、2024年2月に、レッジョ・エミリア市を訪問し、現地での研修に参加した。国内と現地で収集した文献、ウェビナー及び対面のレクチャーを通して、レッジョ・エミリアのドキュメンテーションとは何か、ドキュメンテーションと子どもの権利はどのように関連しているかということを検討した。

[スウェーデン]

文献研究を行うとともに、レッジョ・インスパイアドの就学前学校のペダゴジスタ/アトリエリスタを講師とし、2021年11月、2022年2月に、調査協力園の保育者の参加も得て、ドキュメンテーションによる保育実践についてのオンラインセミナーを開催した。

また、2023年2月に、ストックホルム市、及び近隣都市のレッジョ・エミリア・インスパイアドの就学前学校5校を視察し、各学校の、子どもの声を聴くことを中心に据えた教育環境やドキュメンテーションの活用方法について保育者への聞き取り調査を行い、共通点や差異を確認した。さらに、2023年9月にも、ストックホルムやウプサラを訪問し、就学前教育施設の見学、教師の聞き取り調査、同国の研究者との意見交換を行った。

(2) 国内調査

5名の共同研究者が、それぞれのフィールドの協力を得て、ドキュメンテーションを用いた「子どもの声を聴く」実践的研究を行った。各テーマは、アート表現の探求 アートの遊びの探求 保育者の関係性の変容の検討 言語的文化的に多様な子どもの理解 プロジェクト型保育の探求である。

4. 研究成果

(1) 海外調査

[イタリア]

第一に、レッジョ・エミリアのドキュメンテーションは、子どもの声に耳を傾けるばかりでなく、子どもが世界に耳を傾けること、子どもとともに世界に耳を傾けるためのものとしてある。ドキュメンテーションは、第一義的に「聴くことを打ち立てる」ものであるとされる。そこには子どもの声、とりわけ子どもの考えや発見が含まれているが、それだけではなく、世界に耳を傾けることを含んでいる（浅井，2024）。

第二に、レッジョ・エミリアのドキュメンテーションは、子どもの権利条約の第12条の意見表明権を乳幼児に保障するためのものとしてグローバルに位置づいている。レッジョ・エミリアの幼児教育には、いわゆる言語以外の身振りやジェスチャーや表情、粘土、絵画、詩、ダンス等を言葉として捉える「100の言葉」という概念と、メモ、録音、写真、ビデオなどによるマルチモダルな記録のツールであるドキュメンテーションがある。これらが乳幼児の意見表明権（聴かれる権利）の実現を支えている（浅井，2025）。

[スウェーデン]

スウェーデンでは、1970年代末からレッジョ・アプローチが注目され始め、1993年にはレッジョ・エミリアとの共同研究（ストックホルム・プロジェクト）が創設され、スウェーデンの幼児教育変革の契機となった。このプロジェクトでは、これまでの教育思想、価値などが問い直され、新たな観念や概念、価値の再構築をめざした理論的研究が進められるとともに、保育施設とのネットワークが組織され、ドキュメンテーションを教育ツールとする実践研究が推進された。中心人物のダールベリらは、この経験を踏まえ、子どもを有能で活動的な学びの主体とする子ども観、社会構成主義などによる学習観に基づく教育実践のツールとして、教育ドキュメンテーション(pedagogisk dokumentation)を提案した。また、この国では、1990年に子どもの権利条約を批准しており、1998年の就学前教育カリキュラムの制定以降、「子どもの参加/影響力」を主要な教育方針と位置付けている。したがって、教育ドキュメンテーションは、子どもの声を聴き、参加する権利を保障する教育実践の手段としても周知されている（白石，2022）。

以下は、現地の視察、調査の結果の要点である。

まず、2023年2月にストックホルム近郊のレッジョ・インスパイアード学前学校5校を視察し、教育環境にどのような共通性と差異があるのかを検討した。その結果、全ての学校がナショナルカリキュラム及び教育目標のもとで意図的に教育環境を整えていた。また、多様な文化的背景を持つ子どもや乳児の学びに対する有能性を捉え、すべての多様な子どもが学習に参加することを保障するとともに、ドキュメンテーションを通じて子どもたちの個別的、集合的学びの過程を丹念に捉え、それについて教師同士や教師と子どもで対話を重ねる文化が根付いていることがわかった。一方で、探究のプロセスにおける表現活動の位置づけ方には学校間で差異があることがわかった（内田，2023）。

また、大人と子どもが共につくる共同体として就学前施設を捉えた時、権利の保障は教師など大人の側の問題としても検討される必要がある。この点に関して現場実践者との議論から示唆されたことを二点指摘する。一つは、小部屋から構成されることの多い公立園では、各部屋の環境構成に担任の好みが反映される自

由度が高い点である。たとえば、ギターが好きな教員が中心となって使う部屋には壁一面に多くのギターが吊り下げられており、子どもたちと一緒に使うという。教師の個性化を認めることは、子どもたちにとって貴重な学習機会になっているはずだ。もう一点は、責任の移行を促進する雇用体制である。スウェーデンでは、高校卒資格で1年間の養成教育を受けた保育者 (barnskötare) と 3.5 年の大卒資格でなる教師 (förskollärare) とでは責任範囲は明確に違う。しかし、そこには高い流動性があり、意欲のある者は無償の大学教育を受けることで教師になれる。また、移民であっても母国で学んだ単位をベースに、単位互換なども行い、保育者や教師の資格を取りやすくしている。教師の中には大学院修士課程、博士課程に進学したりする人も少なくなく、研究と実践の対話を容易にする素地がつくられている。こうした雇用の柔軟性は、権利を巡るさまざまな思想を現場教師が理解する文脈を形成しているのではないだろうか。

(2) 国内調査

[アート表現の探求]

世田谷区の私立保育園と、ドキュメンテーションを用いた探究の共同研究を行った。子どもの声を聴くということ、「最善の利益」との関係だけで捉えるのではなく、子どもの考えや思考を聴くこととして捉え、アートの表現を取り入れた探究活動をデザインした。「光と影」の探究において、教師がドキュメンテーションを解釈するばかりでなく、子どもたちがドキュメンテーションを解釈する場面が見られた。また、子どもたちの撮影した写真や描いた絵が、ドキュメンテーションとなる場面もあった。

[アートの遊びの探求]

学習と遊びを巡る議論には、(学校的)学習と(就学前の)遊びを不連続なものとする見解と、両者を一体あるいは連続的なものとして捉える見解がある。日本は実質的に長年分離論を取って来た。遊びを学習と連続するものとして捉える根拠は、両者がどちらも(何を学ぶかを探求する)exploring-what を重視する活動であるからである。通常学校的学習では、学習者は inquiring-how(やり方を問う)ことだけが許されている。研究を想定すればわかるように、inquiring-how は exploring-what の過程で求められるものであり、両者は本来密接に絡み合ったものである。この両者の絡み合いを学ぶ活動がアート活動であり、アートとしての遊びである。しかし、アートを教育の名の下に実践する場合、inquiring-how に焦点をあてるデザイン活動になりがちである。exploring-what と inquiring-how の絡み合いを学ぶ機会となるアートの遊び活動をどのように構想するのが今後の課題となる。

[保育者の関係性の変容の検討]

2020 年度から 2024 年度にかけて、継続的に複数の園の園内研修に参加し、保育者同士が子どもの姿や日々の保育について声を交わし合う場づくりに関わってきた。保育者が自らの経験を言葉にし、他者と共有することを通じて、実践を省察するまなざしが少しずつ育まれていった。

さらに園の枠を越え、保育者が参加する私的な研究会を立ち上げ継続して実施している。この研究会では、各自が自らの保育実践をドキュメントした記録(写真・動画・記述等)を持ち寄り、それをもとに他者と語り合う。そうした語りの営みは、保育者が自身の園文化の文脈から一時的に離れ、実践を再訪する契機となり、新たな子どもの姿や関係性に拓かれる場ともなっている。

[言語的文化的に多様な子どもの理解]

2020 年度～2024 年度に、群馬県内のブラジルにルーツのある子どもたちが通う保育施設において、継続的に多様な表現を楽しむ遊びのワークショップ(多文化プレイショップと呼ぶ)を実施し、文化的背景が異なる子どもたちの探求における可能性を引き出す活動を試みた。その結果、マルチモダールな表現媒体を導入することによって、言語的に多様な背景をもつ者同士でも、相互性を深めたり(内田, 2021) 多元的な意味

構築の場を創出し得る（内田，2023）ことが明らかになった。また、活動時の探求を行う子どもたちの姿を写真媒体で記録しプレイシヨップ・レターとして保育者や保護者に配布することにより、子どもの探求する姿を共有した。それにより、保護者と保育者との間で子どもの姿についての対話が促進された。

〔ドキュメンテーションによるプロジェクト型保育の探求〕

2020年度～2024年度に、名古屋市にある民間保育園の3～5歳の異年齢クラスにおいて、教育ドキュメンテーションによる探究活動を試みた。その結果、子どもにとっての意義として、主に次のことが明らかになった。第一は、子どもの興味の対象や探究活動のプロセスを可視化することは、子どもの興味や活動意欲の維持、促進につながることである。第二は、ドキュメンテーションを、写真を用いた記録文書と捉える傾向があるが、子どもの描画、粘土などの制作物（作品）、音や体の動きによる表現など多様な形式があると理解すること、また、多様な表現方法を用いることにより、子どもの思考やイメージに耳を傾けることができること。第三は、ドキュメンテーションを資料として仲間や保育者と対話することは、体験内容を共有し、新たな問いが生まれる契機となる。また、仲間や保育者と共に探究を深める道を拓くということである。

しかし、教育ドキュメンテーションの実践方法については、まだ多くの課題があることも明らかになった。特に、子どもたちの興味や問いを保育者がどのように聴き、それをどう可視化するか。それを資料として、保育者は子どもとどのように対話し、探究活動をどう方向付けていくのかなど、意味生成としての子どもの学びの援助については、今後さらに研究を深める必要があると考える。（白石，2024）

（3）「子どもの声を聴く」保育実践の基本モデル

レッジョ・エミリアの「傾聴の教育学」やその影響を受けたスウェーデンの理論や実践例を踏まえて、日本での試行的実践を行った結果を総合し、以下を支柱とする基本モデルを考案した。

- ・子どもは有能な行為主体であり文化を創造する市民であるとの子ども観に立つ。
- ・「子どもの声を聴く」ために、多様な表現方法(100の言葉)を用いる。
- ・ドキュメンテーションでは、子どもの興味、思考、アイデア、ファンタジー等を可視化する。
- ・ドキュメンテーションを媒介として、子どもたちと保育者や大人が対話する機会を設け、再訪、省察、解釈を通して、知識や価値の共同構築をめざす。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 8件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 11件）

1. 著者名 浅井幸子	4. 巻 19
2. 論文標題 子どもの権利条約の現代史 - レッジョ・エミリアを参照して	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 幼児教育史研究	6. 最初と最後の頁 23-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20658/youjikyokushi.19.0_23	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 白石淑江	4. 巻 15
2. 論文標題 スウェーデンの就学前学校カリキュラムの改訂を巡る - 保育・就学前教育の政策との関連から -	5. 発行年 2025年
3. 雑誌名 愛知淑徳大学論集 福祉貢献学部篇	6. 最初と最後の頁 28-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Hiroaki Ishiguro	4. 巻 67
2. 論文標題 Pretend act has the potential to inhibit children's exploration: What happens when children encounter undefined artworks in the playground?	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 立教大学教育学科研究年報	6. 最初と最後の頁 49-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する
1. 著者名 井上知香	4. 巻 14
2. 論文標題 教師の実践的省察に関する思想の変遷	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 愛知淑徳大学論集 福祉貢献学部篇	6. 最初と最後の頁 45-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 内田祥子	4. 巻 23
2. 論文標題 レッジョ・インスパイア ド就学前学校における学習権の保障としての教育環境：ストックホルム近郊の 就学前学校の視察を通して	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 高崎健康福祉大学紀要	6. 最初と最後の頁 115-130
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 内田祥子、蓮見絵里、渡辺貴裕	4. 巻 23
2. 論文標題 アートワークショップにおける多層的な意味生成のための 土台づくり 日本に暮らす多様なルーツを もつ子どもたちの支援展開に向けて	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 高崎健康福祉大学紀要	6. 最初と最後の頁 p.47-60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 白石淑江	4. 巻 13
2. 論文標題 スウェーデンの就学前教育における組織的な質の取り組み - スtockホルムの公立就学前学校の質の取り 組みの調査から -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 愛知淑徳大学論集 福祉貢献学部篇	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 内田祥子	4. 巻 22
2. 論文標題 保育者を志す学生は多様な文化的背景を持つ子どもの「声」をどのように聴いたか 多文化プレイショッ プにおける遊び事例の生態学的記述	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 チャイルド・サイエンス	6. 最初と最後の頁 42-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 浅井幸子	4. 巻 167
2. 論文標題 レッジョ・エミリアのドキュメンテーション - 歴史的視点から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 発達	6. 最初と最後の頁 23-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 浅井幸子	4. 巻 61
2. 論文標題 南オーストラリア州におけるレッジョ・インスピレーション	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東京大学大学院教育学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 391 - 400
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15083/0002003517	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 白石淑江	4. 巻 12
2. 論文標題 教育ドキュメンテーションにおける子どもの参加 制作途中の自画像についての子どもと保育士の対話場面の考察	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 愛知淑徳大学論集 福祉貢献学部篇	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 白石淑江	4. 巻 11
2. 論文標題 スウェーデンの就学前教育における質の取り組み - 学校査察庁による調査報告に基づいた現状と課題	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 愛知淑徳大学論集福祉貢献学部篇	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計22件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 内田祥子、鮎澤裕子、浅井幸子、白石淑江、井上知香、石黒広昭
2. 発表標題 就学前期における「学習」の展開 - 学習とドキュメンテーション (pedagogical documentation)
3. 学会等名 日本保育学会第77回大会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Hiroaki Ishiguro
2. 発表標題 Aesthetic Literacy Learning through Playful Fantasy - Making for Preschool Children Belonging to Non-dominant Linguistically and Cultural Communities
3. 学会等名 Brighton, England, EECERA 32nd Conference
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Chika Inoue, Ikuko Goto
2. 発表標題 On the Leadership of the Principal Enabled an Agentic Reflective Learning Community among ECEC Teachers
3. 学会等名 Brighton, England, EECERA 32nd Conference
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 今井邦枝、山西加織、内田祥子
2. 発表標題 責任実習指導案に記述された「子どもの姿」からみる学生の子ども理解 - 幼稚園教育実習における検討 -
3. 学会等名 日本保育学会第77回大会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Kei Kihara, Yoshie Shiraishi, Ingrid Engdahl, Sofia Granqvist
2. 発表標題 A Twinning Project Between Japanese and Swedish ECEC Setting
3. 学会等名 Bangkok, Thailand, OMEP 76th International Conference
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 内田祥子、白石淑江、井上知香、石黒広昭
2. 発表標題 子どもたちの「体験」が「学び」になるためには何が必要か？ - 教育ドキュメンテーション(pedagogical documentation)の役割と課題
3. 学会等名 日本保育学会第78回大会
4. 発表年 2025年

1. 発表者名 内田祥子、白石淑江、井上知香、浅井幸子、石黒広昭
2. 発表標題 就学前期における「学習」の意味を問う 学習とドキュメンテーション (pedagogical documentation)-
3. 学会等名 日本保育学会第76回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 浅井幸子
2. 発表標題 子どもの権利条約の現代史 - レッジョ・エミリアを参照して -
3. 学会等名 幼児教育史学会第19回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Hiroaki Ishiguro
2. 発表標題 Pretend act has the potential to inhibit children's exploration of objects themselves: what happens when children encounter undefined artworks in the playground?
3. 学会等名 31st Annual Conference of EECERA, Lisbon, Portugal. (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 今川恭子、丸山慎、町山太郎、村上康子、伊原小百合、石黒 広昭
2. 発表標題 エコロジカルな視点からの音楽表現カリキュラム 赤ちゃん学からの提案
3. 学会等名 日本赤ちゃん学会第23回学術集会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 今井邦枝、内田祥子、山西加織
2. 発表標題 学生の子ども理解を深める実習記録の試み(2)
3. 学会等名 日本保育学会第76回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 内山沙知、山中健司、白石淑江
2. 発表標題 わたしってどんな人?(2) - 自画像についての語り合いを通して自己を探究する子どもたち -
3. 学会等名 日本保育学会第76回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Yoshie Shiraiishi, Sachi Uchiyama
2. 発表標題 Let's take care of the sea together! -Emotional experiences influencing children's exploring activities-
3. 学会等名 12th OMEP Asia-Pacific Conference (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 浅井幸子、白石淑江、井上知香、内田祥子、鮎澤裕子、石黒広昭、川上りえ
2. 発表標題 子どもの表現とドキュメンテーション - 子どもは粘土という言語をどう使うか? -
3. 学会等名 日本保育学会第75回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 浅井幸子
2. 発表標題 ドキュメンテーションにおける写真
3. 学会等名 乳幼児教育学会第32回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 内山沙知、山中健司、白石淑江
2. 発表標題 わたしてどんな人? - 等身大自画像を描くことで自己を探求する子どもたち -
3. 学会等名 日本保育学会第75回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 内田祥子・鮎澤裕子・白石淑江・井上知香・石黒広昭
2. 発表標題 ドキュメンテーション実践の理論的展望と課題 イメージ媒体を用いた子どもの参加
3. 学会等名 日本保育学会第74回大会、自主シンポジウム
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 縣 拓充・西村 徳行・中野 優子・石黒 広昭
2. 発表標題 アートと学びの可能性を探る：その1 学校・大学における実践
3. 学会等名 日本認知科学会「芸術と情動」研究分科会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 浅井幸子
2. 発表標題 南オーストラリア州におけるレッジョ・インスピレーション
3. 学会等名 日本教育学会第80回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 浅井幸子
2. 発表標題 学びの主体としての子ども
3. 学会等名 日本教育方法学会第23回研究集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 石黒広昭
2. 発表標題 幼児の芸術体験の研究：外遊びにおいて幼児はどのように芸術作品と出会うのか
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 白石淑江、井上知香、最上秀樹、米川香織、石黒広昭、内田祥子
2. 発表標題 自主シンポジウム「保育にとって記録とは何か - 日本の保育はReggio-inspired Pedagogical Documentationから学ぶことがあるのか」
3. 学会等名 日本保育学会第73回大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 秋田喜代美・松本理寿輝監修、東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター、まちの保育園・こども園編著(浅井幸子分担執筆)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 中央法規出版	5. 総ページ数 180
3. 書名 『保育の質を高めるドキュメンテーション - 園の物語りの探究』（浅井幸子「何のために保育記録を書くの？ 記録の目的・機能とドキュメンテーション」）	

1. 著者名 松井剛太、松本博雄（編著）、浅井幸子、中西さやか、大野歩、水津幸恵、片岡今日子、古賀琢也、濱田祥子、佐藤智恵（著）	4. 発行年 2024年
2. 出版社 北大路書房	5. 総ページ数 228
3. 書名 子どもの声からはじまる保育アセスメント - 大人の「ものさし」を疑う	

1. 著者名 桃枝智子、井上知香、金允貞（編著）	4. 発行年 2024年
2. 出版社 大学図書出版	5. 総ページ数 124
3. 書名 保育内容「人間関係」子どもと共に育つ保育者を目指して	

1. 著者名 白石淑江、山中健司（編著）	4. 発行年 2024年
2. 出版社 新評論	5. 総ページ数 164
3. 書名 子どもとともにする「教育ドキュメンテーション」	

1. 著者名 青山誠、三谷大紀、川田学、汐見稔幸（編著）、溝口義朗、久保健太、宮武大和、浅井幸子、佐藤寛子、松井剛太（著）	4. 発行年 2025年
2. 出版社 北大路書房	5. 総ページ数 272
3. 書名 子どもをあらわすということ	

1. 著者名 幼児教育史学会監修、小玉亮子・一見真理子編 浅井幸子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 萌文書林	5. 総ページ数 392
3. 書名 『幼児教育史研究の新地平 下巻 幼児教育の現代史』「トランスナショナル・ドキュメンテーション」	

1. 著者名 Kayoko Komatsu, Kikuko Takagi, Hiroaki Ishiguro, Takeshi Okada	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Brill publisher	5. 総ページ数 294
3. 書名 Arts-Based Methods in Education Research in Japan.	

〔産業財産権〕

〔その他〕

TPCEC 教育と保育の理論と実践についての研究会（2020年～2023年） https://www2.aasa.ac.jp/people/cinoue/index.html TPCEC 教育と保育の理論と実践についての研究会（2024年～） https://wpp.shizuoka.ac.jp/tpcec/

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	石黒 広昭 (Ishiguro Hiroaki) (00232281)	立教大学・文学部・特別専任教授 (32686)	
研究分担者	浅井 幸子 (Asai Sachiko) (30361596)	東京大学・大学院教育学研究科（教育学部）・教授 (12601)	
研究分担者	内田 祥子 (Uchida Sachiko) (60461696)	高崎健康福祉大学・人間発達学部・准教授 (32305)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	井上 知香 (Inoue Chika) (80710540)	静岡大学・教職センター・講師 (13801)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計4件

国際研究集会 ミニセミナー「子どもたちと自然科学」	開催年 2024年～2024年
国際研究集会 シンポジウム「スウェーデンの就学前教育におけるLearning と Teaching : 科学・遊び・ アートなどによる実践例を通して」	開催年 2025年～2025年
国際研究集会 Becoming Pedagogue -Bergson and the Aesthetics of Early Childhood Education and Care	開催年 2023年～2023年
国際研究集会 Movement and Experimentation in Young Children's Learning	開催年 2023年～2023年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関